

四門会

第5号



聖マリアンナ医科大学
耳鼻咽喉科学教室同門会

目次

巻頭言 3年目を迎えるにあたって	3
医局構成	4
教室週間予定／入院患者臨床統計	5
OB通信	6
座談会「教室創生期の思い出」	8
教室ゲスト	17
海外留学	20
関連病院紹介 横浜総合病院／積仁会島田総合病院	23
新人紹介	25
新婚さん「妻を語る、自分を語る」	28
私の趣味「釣り」	30
学会デビュー「初めての全国学会・国際学会の印象」	31
平成8年 耳鼻咽喉科教室日誌	34
編集後記	36

巻頭言



3年目を迎えるにあたって

加藤 功

前回の四門会は竹山教授退官記念号でありました。その竹山前教授が申しておられるように平成7年の3月で定年を迎えられた主任教授が、大学創設以来の教授として最後の方々であります。大学はまさしく第2世代の聖マリアンナ医科大学に進んだと言われておりますように、我が大学も創立25周年を迎えました。聖マリアンナ医大耳鼻科も創生期を過ぎて第2世代の発展期に入ったということが出来ましょう。私は真面目に事の重大さを考えております。先代が築かれ培われた学問と伝統、同窓の和を大切に人材の育成を計り教室の発展につなげたいと願っております。私は今、将来につながるもの、これからの学問に乗って行くために4人の中核になる教室員を留学させております。ピッツバーグにおいては堤君が癌の遺伝子治療の研究をしております。この方面の米国の流れは二つあり、一つはp53等の癌抑制遺伝子を導入し治療しようとするものです。もう一つは担癌抑制遺伝子を導入し治療しようとするもので、堤君はこれを今研究しております。聖マリ医大の難治研でもリウマチ熱をDNAの組替えによって治療しようとしています。将来我が聖マリ医大で発展出来るのではと期待しております。

ロンドンのクイン・スケア研究所では岡田君が前庭中枢の認知を研究しております。短期記憶に線状体—黒質—上丘が関係する事が分かって以来、中枢前庭におけるパーセプション（認知）の問題が研究されるようになっております。これは一方ではMRIで機能、ポジットロンで責任部位も同

定されております。

シアトルの渡辺君は下オリーブの視刺激に対するユニットを誘導しています。これは視索核が視運動性眼振の脳幹の第1次中継核であることを我々が同定しましたが、ここに標識物質を入れますと前庭核が標識され、OKNに関係することを示しました。一方では下オリーブが標識されまます。デビット・マール、アルプスの説により小脳皮質で苔状線維系の信号に下オリーブを通る登状線維系の信号が衝突して小脳にアダプテーション（記憶）として残るのでしょうか。大学では肥塚講師を中心に耳石眼反射の検査の確立を目指しており、朝倉君がめまい、顔神麻痺、突発難聴を微小循環障害の立場より研究しています。これら釧の研究は2年後の平衡神経科学会を目指して継続して行きたいと思えます。

高度難聴者でも耳鳴がします。これは耳鳴が末梢ではなく中枢が原因のものがあることを示唆する所見です。越智講師はカルガリーのエガモント教授の所でネコにサルチル酸を投与して耳鳴を起こさせ、これに対する薬物効果を研究して参りました。釧持君がその続きを研究しております。大学は今申し述べたようなテーマでその方向に進んでおります。

私は就任した際の挨拶で教室をone of the bestにしたいと申しました。これは教室員一人一人の自覚、努力なくしては出来ないことです。今後ますますの努力、実行を願うものです。

医局構成

平成9年5月1日現在

大 学	主任教授	加藤 功
	助 教 授	高橋 姿 、肥塚 泉
	講 師	漆畑 保、堤康一郎、 上杉恵介 、岩武博也
	助 手	佐久間惇 (医局長)、田沢 卓、 萩野貞雄 、 宇川英紀 、宮部 聡
	研 修 医	俵道 淳、西野裕仁、小林健彦、桑原大輔、宮本康裕、大塚崇志、小宅大輔、内田 登、榎並厚人、松尾有希子
大 学 院		金子卓爾 、杉浦夏樹、菱澤えり子、新谷敏晴、関 良武、菊地 仁、富澤秀雄 服部康介、尾谷良博
西 部 病 院		大橋 徹、佐藤成樹、小松崎靖
東 横 病 院		越智健太郎、 三井雅夫 、田中健二郎
稲 城 市 立 病 院		鈴木 毅 、秋山由香里
町 田 市 民 病 院		吉野清美、金子卓爾
稲 田 登 戸 病 院		木下裕継、富澤秀雄
横 浜 総 合 病 院		赤尾一郎、菊地 仁
京 浜 総 合 病 院		中島博昭
済 生 会 川 口 病 院		朝倉美弥
島 田 総 合 病 院		矢崎裕久 、服部康介
東 芝 林 間 病 院		勝見直樹
海 外 留 学		岡田智幸、渡辺昭司、釵持 睦
非 常 勤 講 師		飯田 順、石倉幹雄、岩澤 寛、大竹英夫、小野泰三郎、菊地原基敬、菅野澄雄、 瀬戸皖一、星川智英、南 定、渡来潤次
研 究 員		山田善一、曾我敏恵、平沼一良、小松崎貴美、木原紀子、鳥越達也
診 療 技 術 員		久保田成美、山崎圭子、久保田恵子、岡本直子、畠山ひろみ、島田有里絵、飯塚真弓
秘 書		奥川真弓 、 上野千尋

教室週間予定

曜日	初 診	再 来	専 門 外 来
月	加藤、岩武	荻野、尾谷	中耳外来 高橋、佐久間、菱澤
火	上杉	佐久間、菱澤	頭頸部 堤、田沢
水	肥塚	芋川、杉浦	咽頭 宮部、尾谷
			アレルギー 上杉、宮部、尾谷
木	高橋	佐久間、宮部	喉頭 岩武
金	堤	杉浦、菱澤	めまい 加藤、肥塚、荻野
土	交代制	交代制	

入院患者臨床統計

平成8年入院患者内訳	475
中耳	88
めまい	45
突発性難聴	10
顔面神経麻痺	8
鼻、副鼻腔	94
扁桃	53
舌	16
咽頭	35
喉頭	78
唾液腺、甲状腺	35
食道	13

OB通信

最近の母親

南 定

マリアンナの医局を巣立ち、早いもので2年になろうとしている。そこで、小児科の次に子供が多いと言われる耳鼻科で、開業医として地域医療に携わり、いろいろな母親を見て来たが、その付添って来る母親について少々感じたことを述べたいと思う。

最近の母親の多くは、あまり子供を叱らない。決して広くない待合室を走り回っても自分は雑誌を読んでいて知らないふり。また、いたずらをしていてもほったらかし。こちらが注意すると、子供に向かって「ほら、先生に怒られた。やめなさい。」なのが「ほら、先生に怒られた」だ。悪いことは悪いと、注意、教育するのが母親だろう。と怒鳴れないのが、開業医の辛いところだ。また、鼻の処置をしていると、やたら泣きわめく幼稚園児の母親は、「ごめんね、ごめんね、痛いことして本当にごめんね」と言ってくる。何のために医者に来ているんだ。治療しに来ているんだろう。と言えない開業医の辛さ。そういう母親に限って「以前は他の耳鼻科に通っていたんですけど、あそこの先生はすぐ怒るから恐くてこちらに変えたんですよ」と言われると、「ああそうですか」としか言えない自分が歯痒い。

また、先日、耳垢を取りにきた4歳の子供があばれるので、母親が妊娠8ヶ月だったため看護助手に押さえしてもらって処置していると、突然おしっこをその助手のひざに洩らしてしまった。そこで、母親は「あらあら、こんなところで。」と笑うだけで決して悪びれていない。いったいこの人達の思考回路はどうなっているのだろうか。そして、この母親達の子供はいったいどんな大人になるんだろう、と他人事ながら心配する今日この頃である。

近況報告 10回生

菅野澄雄

昭和61年にマリアンナを卒業し山形大より加藤教授が赴任された年に耳鼻咽喉科に入局しました。10年間の研鑽の後、平成8年5月に宮前区有馬に耳鼻咽喉科医院を開業しました。最寄駅は東急田園都市線鷺沼駅より車ですと5分の所で有馬団地の前に有ります。この地を選んだのは、母校と同じ宮前区にあることと、関連の病院にも近く、病診連携に相應しいと思ったからです。実際に各病院の先生方には検査、入院、手術と本当にお世話になっておりこの場をお借りしてお礼申し上げます。

さて近況報告ですが、医者のお家庭ならどこの家庭でもそうだと思いますが私の妻も年々たくましくなり、亭主が居なくても家庭がまわるようになり、先日もババ抜きで子供2人を連れ、首都高を運転してディズニーランドに行き、夜10時の帰宅でした。長男は4月に小学3年生に、長女は小学1年生になります。エスカレーター校なのでこのままうまく行けば“お受験”はしなくてよいのですが、それにしても学費がズシリと家計にのしかかります。マリアンナの学費を出してくれた両親に今更ながら感謝する次第です。私の方は、仕事もプライベートも勤務医時代と変わらないように心掛けています。研究会や勉強会だけでなく、飲み会も誘われれば参加してリフレッシュしています。また運動不足解消のためスポーツクラブでエアロビクスをしています。美人インストラクターのおかげで3年目に突入しました。また、地元の仲間と月に1度伊豆にダイビングに行き、おいしい魚を食べるのも楽しみの1つです。最近夜はめっきり弱くなり、ニュースステーションを見ていると睡魔に襲われ、そのかわり朝は早起きで、家の者にじいさんのようだとされています。

菊地原基敬

私の医師としてのスタートは今から17年前に東京女子医科大学一般外科の門を叩いたことに始まります。3年間外科を研修したのち母校である聖マリアンナ医科大学の耳鼻咽喉科に移ったことから、私の耳鼻科医としての人生が新たに始まりました。外科医としての3年間の経験を生かし耳鼻科では頭頸部外科を主として研究、診療いたしました。この間、稲田登戸病院に2年間出向したり、3ヶ月間国立がんセンターで研修したりし、充実した11年間を過ごしてきましたが、研究、教育、診療と3つのことを要求される大学人としての自分にやや不安を感じ、どちらかと言うと患者相手の診療だけの方が自分には合っているのではないかと感じておりました。このようなときに開業の話があり丁度年齢も40歳を過ぎたこともあり、今後の人生を地域医療の最前線である開業医としてやっていこうと考え、平成6年2月に慣れ親しんだ医局を退職し、同年の4月より聖マリアンナ医大に近い麻生区千代ヶ丘にビル開業いたしました。開業場所は小田急線の新百合ヶ丘駅よりバスで15分ほど入った住宅帯ですが近くにはよみうりゴルフクラブや、よみうりランドがあります。ビル開業ですが同じビルには皮膚科、調剤薬局、郵便局があり、また隣のビルには内科、歯科、接骨院があり、さらに今年からは眼科も開院することになっており、住宅街にできたメディカルビレッジといった感じの場所です。

開業当初は今まで経験したことのない出来事の連続であり、また今までは他人まかせであったことも自分で処理しなければならず、開業前に思っていた状況とは違い色々大変でした。しかし、最近では少し開業医としての立場や考え方も分かってきて、開業にも慣れ少しずつではありますが自分の思い浮かべていた医療もできるようになり、1年目より2年目、2年目より3年目と外来患者数が増えてきており、このことから自分なりに地域医療に貢献できているのではないかと思えるようになってきています。この結果として大学で勤務している時より生活は豊かになりました。しかし、以前は同僚や後輩と医局などで医療のことを話したり、プライベートな

雑談をしたりしてアフターファイブを過ごしていましたが、今はこのような会話の機会もなく、開業して一番辛い点かもしれません。その代わりに、家族との団欒、特に妻との時間が多くなり、一緒にテニスをしたり、二人でショッピングや食事に行ったりする機会が増えたような気がします。先日も近くのテニスクラブ主催によるミックスダブルスのトーナメントに参加し一日楽しく過ごすことができました。テニスは学生時代、テニス部に所属し自信がありましたが開業してからはスポーツと言ったらゴルフを月2～3回する位で運動らしい運動をしていなかったために試合の内容は散々なもので、妻からは軽蔑の眼で見られる始末でした。これからは健康面も考え、ゴルフだけではなくテニスなどのスポーツもして体力強化をはかりたいと思っております。また最近住まいを新築し小さな庭ができたので、この庭を自分たちで作ろうと話が膨らんでおりますが、このためには好きなゴルフを月1～2回に減らし、その他の日は庭作りのために花屋さん足運んだり、ホームセンターに行き、花壇作りのための資材を買い求めに行ったりする日々が始まりそうな雲行きです。しかし、春までには何とか済ませて、スポーツなどで余暇を過ごせるように頑張るつもりです。

以上が、私の経歴と近状です。今回聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教室に同門会組織が誕生することになり、医局出身者としてとてもうれしく思っておりますし、また3年前に医局出身者だけのプライベートなOB会が発足しており、現在この会の2代目会長を任命されておりますが、会長としてOB会会員に本同門会に賛同するように働きかけていきたいと思っております。今回の会報は聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教室の同門会組織としての初めて発行される記念すべき号であり、このような号に出筆できたことをうれしく思います。

OBの先生に近況を自由に書いていただくコーナーです。原稿依頼がありましたらどうぞよろしく願い申し上げます。(編集部)

「教室創生期の思い出」

聖マリアンナ医科大学の創生期に耳鼻咽喉科学教室の開設に尽力された3名の先生に、当時の思い出と苦勞を語っていただきました。

と き：平成8年12月19日

ところ：ホテルパシフィックメリディアン東京

参加者：荻野洋一／吉川由繪／小野泰三郎

聞き手：加藤 功／高橋 姿

〈人事〉

荻野：私は昭和46年に東横病院に耳鼻咽喉科の教授として赴任して来ました。

吉川：研究室が一応完成、工事が完成したのが、47年の夏だったと思うんですが（昭和47年7月1日医学部附属教育研究施設設置）、だいぶ暑かったですね。

荻野：それから、みんな移ったんです。

吉川：その間、東横病院と掛け持ちと申しましょうか。

荻野：先生、東横病院のどのへんに耳鼻科の研究室があったか覚えてますか。

吉川：忘れちゃった。えらく複雑な配置だった様で。

加藤：東横病院から始まって、臨床はそこでやって、研究棟が大学にできたという形になるんですね。

荻野：最初に進学課程の校舎、そして研究棟が出来、1年遅れて病院が出来たんです。学生の教育関連施設として先ず46年の4月に明石会館もできてたんですよ。

吉川：荻野先生赴任されたのが46年4月で。

荻野：昭和46年4月20日に第1回生の入学式がありました。その時はまだ研究棟は完成しておらず、今の学生の体育館のあるところでした。

加藤：スポーツアリーナですね。

荻野：あそこはテニスコートだったんですが、そこにテントをはって入学式をやったんです。実は、今日この集りがあることを猪先生にお電話したんですが、猪先生からうかがって来たことをお話します。

東洋医科大学（後に聖マリアンナ医大と改名）ができることになって、昭和45年に教授の選考が行なわれました。現理事長の前田徳尚先生から猪先生にご連絡があったのだそうです。どういうお話かという、この大学ができることになって、慈恵医大の樋口学長が人事のお世話を下さっているのだけれども、慈恵医大出身の人だけでなく、他の大学からも教授候補者を入れたいが耳鼻科について新潟大学からも候補者を出せますかということだったそうです。そこで、猪先生は私のことを話されたところ、ぜひ立候補してほ

しいと言われたとのこと。それで、猪先生は当時の伊藤辰治新潟大学長にこのことを話されましたら、伊藤学長が樋口先生に連絡をとって下さったことで私が候補者の一人に加えられることになりました。たまたま、昭和45年の8月に仙台で第71回耳鼻総会(東北大学教授片桐圭一会長)が行われた時に私は宿題報告をしました。これも業績の中に書き入れたこともあって業績の内容、数ともに私の方がよかったとのこと。私が選ばれた由でした。私は猪先生からのお話があって履歴書を提出していたのですが、こんなことを言っでは申し訳ないのですが、この大学に来たいという気持は当初余りありませんでした。当時、新設の国立大学医学部が各地に出来る気運にありましたし、長い間国立大学にいてこれから私立の大学の教授になるというのは気が進みませんでした。このことを猪先生にお話ししましたらお叱りをうけ、一度鳥居恵二先生(新潟大学名誉教授一耳鼻咽喉科学)のところへ行って来なさいと言われました。鳥居先生のお宅へうかがって私の気持を話したところ、「いろいろの方が苦勞され、先方から招かれるというような事はめったにあることではないから行きなさい」と強くすすめられました。

これで私も赴任を決心して荷物を造りました。そして書物やデーターのスライドなどまとめ、トラック2台に積んで東横病院に送りました。ところが余りに荷物の量が多くて受け取った事務の方が予定されていた私の教室にこれらを入れることが出来ず、向かい側の別の教授の部屋にまで入れておいてくれました。私は他の方より少し早く昭和46年の3月中旬、東横病院へ行きました。その後、私は荷物の片づけに一週間位かかりましたが、ご存知のようにと東横病院は狭くて余りきれいではありませんでしたので、ずいぶんひどいところへ来てしまったと一時はがっかりしました。

加藤：それはおもしろいですね。

荻野：始めは教授の人数も少なかったので東横病院で教授会をしていました。やがて進学課

程の建物が使えるようになって武蔵小杉から大学までみんなで車にのって行きました。

私が最初に赴任して、次に吉川先生がこられたんですね。

吉川：1年遅れて、昭和47年4月に赴任しました。助教授就任が9月になっておりますが、4月から講師ということで、いたんです。

高橋：最初から助教授ではなかったんですね。

荻野：最初は守安先生が助教授でした。吉川先生は最初は講師でしたが、昭和47年9月に助教授になられたんですね。

吉川：4月の始めから参りまして、そして検査技師の金田さん、片山さん、荻野先生と私と最初は4人しかいなかったです。その前は、まる1年間は荻野先生お一人で。

荻野：昭和46年の始め頃は大了したことも出来ず、守安先生がそれまで耳鼻咽喉科の責任者としてしてこられたのをお手伝いしていました。

そんなところに昭和46年6月にお茶の水女子大からことばの研究をしていた増井美代子先生、また池田勝洪先生が東邦医大からこられました。

吉川：形成関係の先生方が3、4人おられましたね。

荻野：池田君は外科出身の方です。奥さんが耳鼻科医で名越好古先生のお弟子さんでした。

池田先生が名越先生のご紹介で来られ、形成関係の臨床は二人で始めましたが、その後、京大から西村喜彦先生がこられました。西村先生は現在、京都大学形成外科の教授です。彼は京都大学の皮膚科の助手で、形成外科診療班におりました。

吉川：私が来た時にはおられた。

荻野：そのすぐ後に森口隆彦先生(現在は川崎医大形成外科教授)が私のところへ、やはり京都大学から来ました。これで形成外科は私を含めて4名になり、耳鼻科は私と吉川先生、それに佐々木浩先生でした。

吉川：東横病院時代に森口先生には耳鼻科のOpeの時、デビだとかそういうものに入って勉強してもらいました。

菅生の本院が始まってからも最初のうちは形成外科の新入医局員は必ず2~3カ月耳鼻科で実習するシステムがありました。耳鼻

科の基本的診療を覚えながら手伝って頂きまして、Opeは主にデビを目標としておりました。

時代は草創期に接続する時期になります。特に新潟大学耳鼻科教室から大勢の先生方に応援に来ていただきました。

昭和50年5月から52年3月までの間に（その後も幾人もおいでですが、私の在任期間中）おいで頂いたのは、細川 智、小西和朗、羽馬 晃、田辺忠夫、戸田行雄、佐々木秀英、本田 弘、大竹英夫、五十嵐秀一、井口正男、鳥居智子、高橋姿、今井昭雄、五十嵐淑晴の先生方の順（大学人事課記録による）となっております。このご縁で長く当大学に在籍することになった先生もおられます。誠に有り難うございました。

荻野：今私がおります横浜形成外科の二木裕先生も形成外科専門の先生ですが、耳鼻科の外来を私共と一緒にしてくれました。だから二木先生は鼻腔所見がよく判り、また鼻の手術が今でも好きですね。このように耳鼻咽喉科といってもやがて形成外科に進もうとしている先生方も混じって診療をしていたんです。

そのあと吉川先生が病気で休まれたんですね。

吉川：少しあとになりますが、昭和50年です。

荻野：昭和50年ですか。小野先生、佐々木先生と3人だけになったこともありました。

吉川：申し訳ない。

荻野：あの時は大変だったんです。私は形成外科の教授と兼任でしたから、両方しなくてはならずひどい忙しさでした。

小野：竹山先生の紹介で昭和48年8月に私が来て2、3年ですから、まだ大変でした。

荻野：昭和47年から非常勤の先生が始めて加わって下さったんですね。始めは静岡日赤の竹山先生でした。

吉川：佐々木浩先生は47年の7月に講師として赴任して参りました。

荻野：小野先生は昭和48年においでになったですね。その頃の非常勤の先生は、日大講師だった村上嘉彦先生（前山梨医大耳鼻咽喉科教授）、田嶋定夫先生（現大阪医大形成外科教授）は慶応大学の形成外科から、そして自衛

隊病院の渡辺嘉彦先生ですね。

吉川：東横病院には奥野先生、鎌数先生、大城先生がおられました。

荻野：藤本信之先生は日大の耳鼻咽喉科で、めまいの研究をしておられ、お手伝い下さいました。茂木克俊先生は、東京医科歯科大学出身で、MDとDDSの両方の資格をもっておられた先生でした。かつて私も東京医科歯科大学の口腔外科に内地留学したことがあって親しかったものですから加わっていただきました。

細川智先生、戸田行雄先生が助手で入局して下さり、田辺忠夫先生や佐々木秀英先生も非常勤で昭和51年から加わって下さったんです。

阿部千枝子先生は広島大学耳鼻咽喉科の黒住静之教授の教室員で、短い期間でしたがことばの治療の勉強のため増井美代子先生のところへ来られた方です。耳鼻科も手伝って下さいました。その後結婚されご主人と一緒に現在広島で開業しておられます。

高橋：大竹先生は形成から耳鼻科に変わったんですね。

荻野：形成外科に入局したのですが、耳鼻科をしたいといって耳鼻科に変わったのです。

人事をみますと、最初はいろいろな方が援助して下さいました。こうして因縁が出来たことで患者さんをご紹介下さったり、研究のことでアドバイスをいただいたりしてずいぶん助けていただきました。教室が出来た初期の頃はこのような沢山の方々の出入りは必要だったと思います。新潟大学からも交代でお手伝いに来て下さったのですが、最初のころはあまり多くありませんでしたね。

加藤：新潟から来るようになったのは竹山先生の時からですね。

高橋：細川先生が来た時にはまだ荻野先生の時代だったと聞いてます。細川先生、50年の5月ですから、まだ竹山先生ではない。戸田先生が来たのが51年の1月ですから、この時もまだ荻野先生の時代です。

吉川：羽馬先生も田辺先生もご自分の仕事を犠牲にして大学の診療など応援に定期的きて下さいました。本当に助かりました。

〈臨床〉

加藤：本院の臨床が軌道にのったのはいつごろからですか。

吉川：私のメモによりますと、本院の開業が始まったのがですね、昭和49年2月12日火曜日です。

予定通り開院し、新患が15名となっております。もちろん初日の新患は教授がご覧になっていますから、我々はお手伝いをしました。

小野：私がお前の前の年の48年の8月に来てます。医局の方から見て、建築中の病院を吉川先生と見学に行った記憶があります。

吉川：昭和48年6月に病院の南側にある研究棟ができたんです。

小野：医局にはたくさん荷物がありましたね。われわれは隅の方に固まっていた。

吉川：47年の7月1日に研究棟ができたんですね。コンクリートの乾燥のために毎日行ってエアコンを全部入れて回るといふ仕事から始まったわけですね。金田さんと片山さんは午前中東横病院の外来で聴力検査をし、午後は佐々木先生と私が二人を車に乗せて東横病院から菅生まで行きまして、研究室の内装ができたばかりのところへ、一夏毎日エアコンを入れるのが仕事でした。入れておかないと、水がジワジワ出るん

ですね。小野先生も言われたようにどーんと荷物いっぱいになりまして、いろいろな実験器具を開梱しまして、それを配置し、洗ったり、消毒などを半年くらいやりました。

当時は真夏でございまして、照りつけられた研究室のエアコンが効いてくるまで、凄く暑い思いをしました。

荻野：病院が開院したのは昭和49年2月12日ですか。開院した

時の外来には15名の患者さんがこられたんですね、その時は病室はopenしていたのでしたっけ。

吉川：病室はございました。すぐに入院もできる支度をして開院しました。

荻野：最初にオープンした外科系病棟は6東が小児病棟、6西が成人病棟でした。6北と6南は内科系の病棟だったと思います。

現在の7東に耳鼻咽喉科、形成外科そして皮膚科が移ったのは昭和50年4月18日で、当時は遠方から来て入院された患者さんのご家族のために8南の個室を宿泊の場所として提供していました。そして7東の最初の婦長さんが戸塚規子さんでした。

吉川：2月20日の水曜日、OKKの患者さんが至急入院しました。某大学でOpeをされて、その後再入院させてもらえず困ってしまっ

た。荻野：登戸の人ですね。某大学で上顎癌の手術を受けたあと通院治療をしていたんですが、可成悪くなって、その大学では入院させてもらえず、是非入院させてほしいとお願いされたのです。入院されて1週間もたたぬ内に亡くなられたのですが、この方が耳鼻咽喉科で亡くなった第1号でした。

吉川：亡くなったのが2月22日の金曜日午前2時9

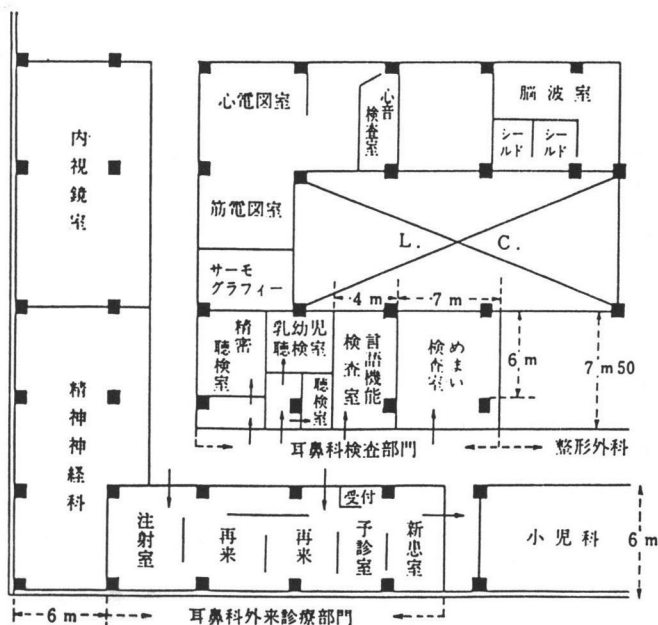


図1 耳鼻咽喉科外来

分とメモに書いてございます。さっそく剖検の第1号を患者さんの家族に承認を頂きまして、手配したんでございますが、残念ながら病理の方の支度がまだ完成していなかった。実はコンクリート台の高さが少し違ったので作り直そうということで、台の高さが悪いから剖検できないということで断わられてしまったんです。誠に残念でございました。非常に憤慨したんですけども、止むを得ない。

診療開始当時の外来担当表がありました。

	月	火	水	木	金	土
新患	佐々木	荻野	吉川	荻野	小野	吉川
再来	吉川	小野	佐々木	佐々木	吉川	小野

荻野:耳鼻咽喉科の外来の配置図は図1のようになっています。廊下は約330m² (100坪) でした。廊下をはさんで診療部門と検査部門(聴力検査室、めまい検査室、ことばの検査室)とが向い合っており、検査室は出来るだけ広くとるようにしました。聴力検査室は精密聴検室、乳幼児聴検室、一般聴検室の3つを設け、各検査室がそれぞれ別個に十分機能を発揮できるように入口の位置を工夫しました。めまい検査室は内部に区画を設けず 広い一つの大きな部屋とし、入口は中央に作りしました。

また検査室は常時空調が出来るよう設備しました。

外来診療室は、医師および看護婦と患者さんの動きを別々にとれるよう窓側は各室とも1m ずつ隔壁をとり除いてあります。

加藤:午前中は外来で、午後は手術というような形になるわけですね。どうして病棟が6階から始まったんでしょうか。その他は出来てなかったわけですか。

荻野:そうではなく、病棟は一応みんな出来ていたんです。

加藤:看護婦さんですか。

荻野:たしかに看護婦さんの数がまだ十分でなかったということもありますが、一度に全部の病棟を open しても採算がとれるような状態になるか判りませんから、病院としては、ま

ず6階の floor のみ open したと思います。

4階はご存じのように事務、看護部、病歴室などがあって病棟としては使えませんが、5階は産科や婦人科、それに内科系小児病棟として初めから特殊な設計でしたから、6階がどの科でも使い易いということで選ばれたのだと聞いています。

吉川:菅生の大学病院が開院されて当初は、耳鼻科のOpeの実状は私と佐々木先生の二人だけでOKK、KKK その他の悪性腫瘍、良性腫瘍や当時流行のFcialis dekompressi-n、翼口蓋窩の開窓等々、来院された全症例を受け入れて当時の臨床水準なりに頑張りました。形成の絡むOpeは必ず荻野教授と一緒に下さいました。当時日本では開発の緒についたばかりのCO2 LASER で幼児の舌リンパ腫の手術をしたのも思い出されます。なにしろ私も佐々木先生も本院の開院まで1年以上も臨床に飢えていましたから、当時最高の施設を望み通りに与えられまして水を得た魚が泳ぎ返るように張り切っておりました。

高橋:開設前に戻りたいんですけど。手術の道具とか、外来のいろんな処置の機械とかユニットとかそのリスト作りをされた時期があると思うんですね。今手術場の道具とか見ますと、ずいぶん前の古いものですけどアブミ骨手術の道具が用意されていて、しかも数がキチッと揃ってる。たぶんあの作業が相当大変だったんじゃないですか。

荻野:それは中材の仕事でした。開院前に外科系の副院長の犬塚潔武先生と私を中心になって、各科外来のいろいろの処置の器械、ユニットなど比較的共通するものと各科に特有の器械、器具のとりまとめをしました。その時にこれらのものは丸紅が仲介業者として入ったために価格の安いものが選択され、質のわるいもの、とくに鑷子、鉸はよくありませんでした。これらはあとで買いなおしをしました。

耳鼻咽喉科の手術器械はよいものが入ったと思います。

吉川:ただ中材とは別に耳鼻科は耳鼻科で機械を申請しました。あれは全部永島医科器機に注文しましたね。荻野教授の計らいで、外来用と

手術場用と病室用と、あとプラスアルファがございまして、どこか出張に行くときにも担いでいけるように非常用に小さいセットがありました。

荻野：新潟大学の耳鼻咽喉科の手術室のリストをもらって来て、それを基準に吉川先生、小野先生、佐々木先生と相談してきました。病棟にもユニットをいれましたね。

吉川：はい。めまいと聴力の検査室もちゃんとできています。

加藤：今は看護婦の詰所とか、婦長の部屋とかですね。変わってます。

荻野：最初に器械を買うときにしっかりやらなかった科は後で大変だったようです。科によっては使いもしない余計なものを買ってこいちゃダメ、それらが看護学校の寮の一階のホールにしばらくの間、倉庫のように入れてありましたし、霊安室の方へおる階段のおどり場や廊下にも置いてありました。

新潟大学の耳鼻咽喉科の外来診療室とは全体によく似た感じでしたから新潟大学からお手いに来て下さった先生は余り違和感はないかなと思うんですが。

加藤：それに外来は広いですよ。それから手術器具とかに対してお金をふんだんに使っていますね。山形でやった時よりすごく豊かな気がしますよ。

吉川：そこは荻野先生の政治力ですよ。

加藤：そうですね。

吉川：公平の原則がありますから。各科共いくらって割り当てられますから。それをどうにかすることは出来ないわけですね。

荻野：耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、泌尿器科というのは小さい科と従来いわれているのですけれども、我々これらの科

の教授はみんな平等であるということを主張したんです。だから研究室は全部同じ広さで、耳鼻咽喉科は第1外科と同じだと思います。教授会のとときに一生懸命になって平等の原理を主張しました。ベットの数は少なくとも特殊な科ということで耳鼻咽喉科や眼科は器械をかなり買ったと思います。

この外来の検査室の配置はいかがですか。聴力検査やめまい検査室ですが。

高橋：この配置は素晴らしいと思うんですね。一般に検査室はどうしても狭苦しくて、検査員も窒息状態みたいで、イライラしてくるんですけど、非常にスペースがよく取ってある。

荻野：聴力検査室は、精密聴力検査室の入口と一般聴検室、乳幼児聴検室の入口をそれぞれ別々にして、お互いに邪魔せずに検査が出来るようにしようと考えました。めまいの検査室も可成広くとったのですが、現在は使っていないんです。

加藤：スペースが広いもので、あそこをふたつに仕切って、回転椅子を置きましてやっています。

荻野：病棟のアレンジですが、ナースコーナーと医師コーナーが真ん中にあり、周囲に病室が並んでいるという形になっています(図2)。

最近の病院の病棟はこのような形になっ

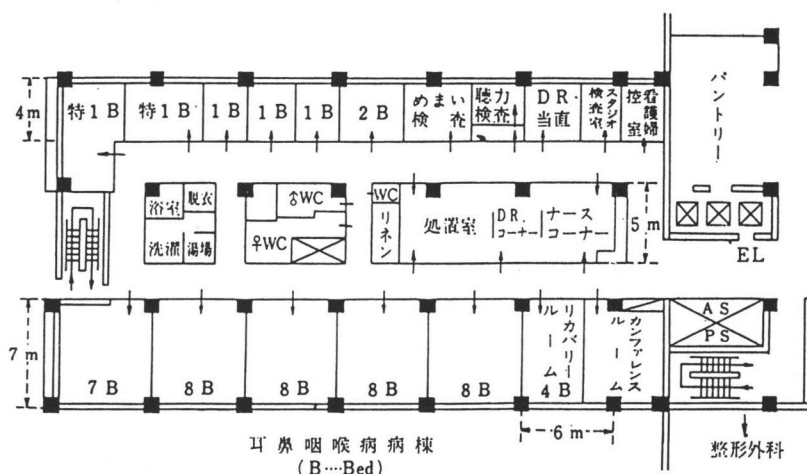


図2 耳鼻咽喉科病棟

ているものが多いのですが、一見よいように思えるのですが、使ってみて問題があることを感じました。

それは、真接太陽の光がないということです。この状態の中で仕事をしていると精神的な疲労がたまりま

す。最近、この中央のコーナーを一方の窓ぎわによせるようになりました。私は形成になった時に、以前の失敗にこりて、ナースコーナーの一部に窓をつけるようにしてみました。とてもよかったです。

この病棟は4床を含した。始めは耳鼻咽喉科と形成外科で使っていたんですが、形成外科が移動して皮膚科が入ったように思いますが、現在はどうでしょうか。

加藤：いいえ。眼科が入ってます。

荻野：眼科が入ったんですか。

加藤：耳鼻咽喉科病棟ということで50床ですね。

荻野：50床ですね。初めはベットが空いていてもそれほど問題にはなりません。最初はまず病棟のベットをしっかりと確保することが重要でした。私は当初、耳鼻咽喉科と形成外科の兼任でしたから2つの科が互いにベットの使い方をうまくしたのでよかったんだと思います。

加藤：ナースステーションを真ん中に持つてくるのは陽が当たらないからダメなんですか。

荻野：空気の動きがない。太陽光線が入らないということは、精神心理的に良くないですね。心の休まることがない、ストレスが多いと思われま

す。たとえばナースステーションリカバリー室の方とつながっているような形だとい

いんです。ただこの病棟の設計は非常に便利にはできていますね。これは当時

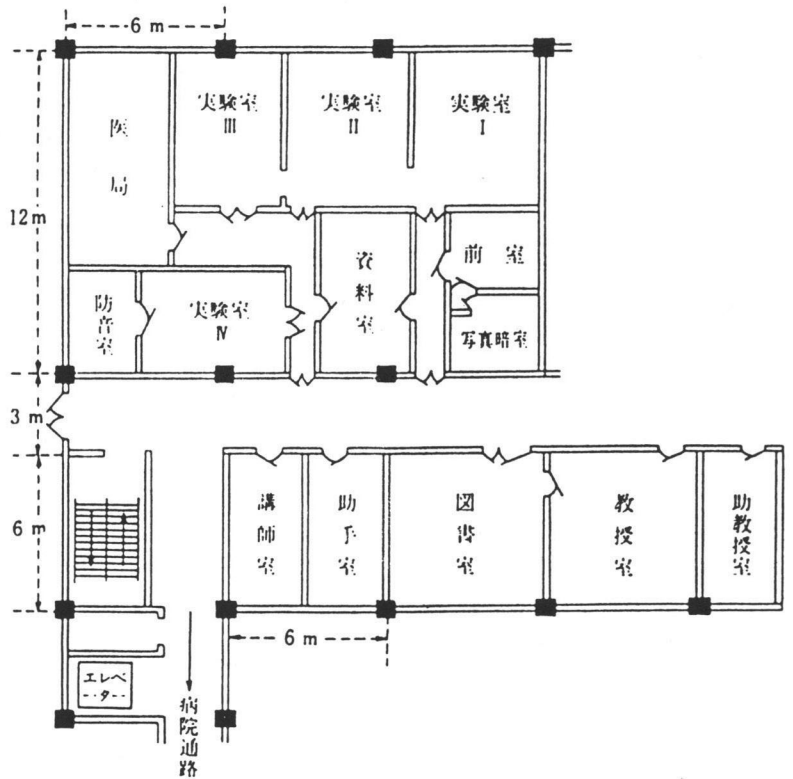


図3 医学部本館内（2階）耳鼻咽喉科外来

としては一番理想的だったんだと思います。小野：そうですね。上の方の仕切りがないですから。カウンター式で。あの形が非常に新しい感じがしました。

荻野：でも看護婦さんは落ち着いておられないということがありますね。

加藤：今の別館のほうもそういうふうではないですか。丸テーブルが置いてあって、カルテを書いたりするのに医者は立って書いていますね。

非常に斬新に見えるんだよね。

荻野：別館へ行ってごらんになると判りますが、別館のナースステーションには窓があるんです。

高橋：そうですね。

荻野：あれは旧館の病棟のスタイルの反省からあな

ったんだと思います。別3南の形成外科だけでなく別館の内科病棟も大体同じように造られています。

〈研究と教育〉

高橋：研究のことにも触れていただきたいんですが、昔来たときに非常に印象に残っている

のは聴検の部屋に素晴らしいABRがありましたね。初めて見て非常に感激したんですけど、あれはまだ新潟大学にもなくて、リオンかなにかの、吉川先生が組み込まれた。

吉川：丁度ABRの草創期で、まだABR専用市販器は無かった時代でした。

リオンから電子スイッチを4台借りまして、当時は高かったです。（見積書で1台66万円）これを利用してNF回路ブロック社のジェネレータの出力を加工しまして、任意の波形を正逆交差逆転させたり、思い通りの刺激音を作れるシステムを作りました。加算機も古典的なものでした。実際にABRのシステムを動かしてくれたのは金田さんと片山さん。ちゃんとやってくれる能力ありましたので、大変助かりましたね。

この二人には聴覚、平衡覚の臨床検査だけでなく研究助手としての仕事も全部してもらいました。実験器具の整備や動物実験の助手、プレバラートの作製から特殊染色まで、毎日遅くまで時間外手当もなく献身的に働いてくれました。眼振検査の実験台になってもらった時ですが、絶縁不良で片山さんの額部に電気ショックを与えてしまったこともありました。思い返すたびに誠に申し訳なく有り難く感謝しております。

萩野：研究室は図3のように配置しました。現在は多少内部の使い方が変わっていると思いますが、当初は何もないところから始めるのですから大変でした。伝統のある教室では、物は一応そろっているし、人間もいますし、何か足りないといっても新しいものがないだけで基本的なものはすべてあるわけですね。

ところが新しい大学では何もないところからの出発ですから、丁度まだ何も手がつけられていない大地の上に立った農夫のようなもので、鍬一本で畑をたがやして行かねばならないような心境でした。

研究器械設備費は各教室ごとに1500万円分の高額器械と、ガラス器具や薬品といった消耗品費として200万円の配分が決まりましたので、4人のスタッフで相談して大体決めました。

また、講座研究費は当初は毎年200万円づ

つ昭和46年度から与えられましたが、年度内に使い切る必要がなく、残ったお金は翌年繰り越しが認められましたから、無駄には使わず研究棟が完成したあと不足した研究器材を購入することにしていました。

一方、図書や専門雑誌は中央図書費で購入してもらえることがきましたので講座研究費をあてる必要がないことになり、大分助かったと思っています。

吉川：研究室関係だけでも、電線の一本から、ニッパーから揃えなくちゃで、電気生理の実験用微細電極作製器械からオシロスコープなど計測器までとか、組織学および電顕標本用具、撮影装置、分光光度計や化学実験用具一式、一般的試薬やそれらの収納棚、デープリーザー、さらには実験用机椅子の類の雑物など、とても数え上げられませんが大小膨大な物を整えました。

小野：この両方の部屋くらいのところにピッタリ入ってるんですね。梱包が。えらい所に来ちゃったなって。私、始めはスタッフで来るつもりではなくて、見学生っていうつもりだったんです。

吉川：ところが小野先生にはもうすっかりおんぶになって。

小野：萩野先生のところへ行ったら、専任講師でいいだろって言われて驚きました、そんな話全然考えてもいなかった。開業もしてありましたし。

萩野：でも先生は3年か4年間いて下さったように記憶していますが。

小野：やりましたよ。もちろん限界はありましたけど。夕方は早く帰っていいっておっしゃって下さったんで。それで少し早く帰って、そのために研究、手術は十分には手伝わなかったんですよ。それを吉川先生に悪いなと思って。

吉川：毎月末になると、先生顔色悪くなるんですね。レセプトの請求事務が大変だったですよ。

加藤：小野先生は週何回かおいでになったんですか。

小野：専任講師のときはちゃんと来てました。毎日来て、うちは4時か4時半くらいから始め

て、実験やっても途中でやめなければならぬし、手伝っていても、これで失礼っていうことになるでしょ。申し訳ないような、しかし、これで月給もらってと考えると、医局へ朝行って、何かお手伝いして、本読んでたかな。病院そのものが2月1日からだったんですよね。あの調子でできるかな、無理ですねって吉川先生とお話したの覚えてます。12日になって始まって、ああよかったなって思ったんです。それからが臨床と研究でしょ。これは大変だなと思って、そのうち学生の講義が始まると。

加藤：さらに大変だったでしょうね。

小野：4人でどうやって3つの仕事をやっていってかかっていうことがね。

荻野：講義は3年生から行いましたので、準備する期間がありました。切替一郎先生の本を教科書に指定して、恵文堂で学生諸君に買ってもらいました。

これを基本にして教育指針を書き、プリントやスライドを用意しました。

教室のスタッフがお互いにどの部分を担当して講義したかははっきりとは覚えていませんが、主として私が行ったように記憶しています。4名だけで外来、手術、病棟の仕事をし、更に講義を行い、論文もよく書いたんですからお互いよく勉強し、働きましたね。

吉川：私も大変勉強させていただきました。

荻野：私立の医科大学で最も大きな問題は学生の教育の方法ではないかと思いました。教える側が学生の学力などをよく理解しないで今まで自分がいた施設での経験のみにたよって講義をし、試験をして評価をした結果が、第1回生の国試合格率30%というショックでした。

教授会で大きな問題となり、教育の方法についていろいろ論議しました。

吉川：私は昭和52年3月に第1回生を見送って離任しました。

荻野：その頃、川崎医大は合格率がよく100%近かったので驚きました。私共はうちの卒業生も70%か80%は合格するとばかり思っていましたので反省しました。

小野：あれは予備校でしたよね。マリアンナは違

うんですね。

荻野：このことがあってから、聖マリアンナ医大でも学生の教育方法についてみんなが真剣に考えるようになったのではないのでしょうか。現在とは違って当時の学生達の中には特徴のある人たちが多かったですね。今の学生諸君はよく勉強しますか。

加藤：しますね。すると思います。

荻野：やはりきびしく落第させるんですか。

加藤：落としながら進級できるっていうので、主要8科目がよければいきますからね。それが問題になってます。

荻野：学生の教育はなかなか難しいですね。学生の教育もさることながら私たちもよく勉強して、最初の年からよく論文を書きましたね。

高橋：昭和46年だけでもたくさんありますね。

荻野：臨床の仕事を終えると自分の部屋で論文を書きましたが、それは教室の業績の一つでも世に出したいが故でした。

加藤：佐々木先生がレーザーで破壊してる論文がありますね。日耳鼻なんかで発表しています。レーザーガンがありましたからね。

吉川：もったいないことにあれからレーザーを使ってないらしいです。レーザーはありがたかったです。あれは面白く、全員楽しませてもらいました。今でも非常に価値がありますけど。

荻野：私共の耳鼻咽喉科開設当初の歩みはこんなものですが、教室の基礎造りに一緒に苦労して下さった、佐々木浩先生が亡くなったのは一番悲しいことでした。教室のために真面目に、労をいとわずよく盡くして下さったすばらしい人でした。

この後お話は現在に至るまで続きましたが、誌面の都合上割愛させていただきます。3名の先生にはご多忙のところ、お集りいただき深く御礼申し上げます。

教室ゲスト

Bernard Cohen 教授

平成7年7月20日

1950年代から1960年代にかけてNew York、Mt. Sinai University Medical CenterのMoris Bender一派によって眼球運動に関する大脳、脳幹の系統的な刺激および破壊実験が行われました。無麻酔サルを用いて実験が行われたこと、実験が系統的に行われたこと、刺激実験、破壊実験ともその精度が非常に高かったことにより、これら一連の実験はその当時はもちろん、現在も高い評価を得ています。Bernard Cohen教授はBender教授のもとで神経学の研鑽をつまれ、Bender教授が退官後、Mt. Sinai University Medical Center Department of Neurologyの教授に就任され現在に至っています。平衡神経科学、神経学の分野において数多くの業績を残しておられ、特に橋のPPRF (paramedian pontine reticular formation) に水平注視中枢が存在すること、空間認知および水平軸、垂直軸、回旋性眼球運動の制御における速度蓄積機構(Velocity storage mechanism: VSM)の関与等の発見で、世界的に高い評価を得ておられます。Cohen教授の教室には世界各国から留学生が訪れ、これまでに多くの日本人も留学しています。彼の教室に留学した日本人の多くが、その後大学教授等の要職についておられ、そのアクティビティーおよびプロダクティビティーの高さを伺い知ることが出来ます。Cohen教授は現在もアクティブに研究を続けておられ、1998年3月に打ち上げ予定のスペースシャトル上で行われるニューロラブ計画に、「前庭一眼反射による空間見当識の解析」というテーマで参加されることになっています。今回は京都で行われました国際脳神経研究学会 (IBRO) にてニューロラブ計画の概要について講演をされること、またこのニューロラブ計画の日本側の共同研究者の1人であり、本稿の執筆担当である肥塚と

共同研究の打ち合わせをする事を目的に、来日されました。わずか5日間の滞日という大変忙しいスケジュールの中、我々の大学において是非ともご講演をと依頼しましたところ快く引き受けて下さり、「The nucleus of the optic tract; Its many roles in gaze stabilization.」と題する講演を約1時間にわたってして下さいました。nucleus of the optic tract (NOT)の解剖、生理、そしてこの核に関する過去の知見から最新の知見および、NOTに病変を有する臨床例において認められる異常眼球運動の提示等、先生がこれまでに蓄積された豊富なデータを存分に使って、平易な英語でゆっくりとお話しして下さいました。加藤教授はNOT研究における世界的な権威の一人であり、我々の教室もこれに関しての多くのデータを有していることより講演後の質疑応答も大変活発に行われ、実り多い講演会となりました。平衡神経学、神経学における世界的権威であるCohen教授の偉大な業績の一端にふれることが出来、参加者一同、深い感銘を受け、会は成功裡に終了しました。(文責:肥塚 泉)

久保 武教授

平成8年3月15日

両側の高度感音難聴に対する治療法はこれまで皆無に等しかったと言っても過言ではありません。ロサンゼルスにあるHouse InstituteのWilliam Houseがシングルチャンネルの人工内耳の手術を世界ではじめて行って以来、旧東ドイツ、オーストラリアで続々と多チャンネルの人工内耳が開発され、これまでは治療不可とあきらめていた高度感音難聴の患者さんにとって、人工内耳は社会復帰の機会を得ることが可能な大きな福音となりました。日本でも東京医科大学耳鼻咽喉科船坂教授による第1例目を皮切りに、全国で人工内耳の埋め込み手術が行われるようになりました。

これまでに東京医科大学、虎ノ門病院、京都大学、大津赤十字病院、大阪大学、宮崎医科大学等で多くの患者さんが手術を受け、音のある生活を取り戻しておられます。我々の大学においても、最近高度感音難聴の患者さんより人工内耳を是非とも使ってみたいとの要望が高まり、この要望に応えるべく、我々もこれに対する体制を整えることが急務となりました。早期から人工内耳に着手され、現在東京医大に続いて2番目に多い症例数を有しておられる、大阪大学耳鼻咽喉科の久保 武教授に、「大阪大学における人工内耳の展開」と題する講演をお願いしました。大阪大学耳鼻咽喉科は神経耳科学の分野においてこれまで数々の輝かしい業績をあげています。特に1938年に山川強四郎教授が世界に先駆けて報告されたメニエール病の剖検例は、メニエール病の本態は内リンパ水腫であること世界ではじめて証明した画期的な報告でした。その後長谷川高敏教授はメイロンによる動揺病の治療、内藤 僑教授はメニエール病に対する外科的治療法の1つである内リンパ嚢解放術（内藤-ポルトマン変法）の確立、松永 亨教授はめまいの発症に、椎骨動脈の血流の左右差が関係していること、そしてこの左右差の出現に自律神経機能の左右差が強く関係していることを見いだされました。久保 武教授は神経耳科学的疾患に対して、側頭骨外科的アプローチを積極的に活用して成果を上げておられます。

今回の久保 武教授のご講演は、術中ビデオを用いての、具体的な手術法の解説から始まりました。人工内耳埋め込み手術約2週間後に行われる音入れの際、これまで長い間、音のある生活からは見放されていた患者さんがその感激のあまり、涙を流し母親と手を握りあうシーンは実に感激的で、講演会場が一瞬シーンとなったほどでした。久保教授のお話は、臨床的な事項に留まらず、人工内耳埋め込み患者を対象として行った電気ABRの結果、聴覚の可塑性についての動物を用いた基礎的な実験の結果の供覧と、臨床から基礎までの広い範囲の話題を提供して下さいました。参加者一同、深い感銘を受け、会は成功裡に終了しました。

（文責：肥塚 泉）

丸山直滋先生

平成8年2月29日

平成8年2月29日に以前加藤主任教授が師事したという新潟大学丸山名誉教授に講演をしていただきました。丸山先生は、聴覚関係の雑誌で権威のある'Hearing Research'の唯一の日本人editorでいらっしゃいます。

今回は、脳における音の認知に関する実験研究についてお話をいただきました。先生はこの分野の第一人者でいらっしゃいます。基礎的な研究で、内容的にはかなりむずかしいものでしたが、先生の時にユーモアをまじえた大変わかりやすい説明で皆、音の認知が脳の中でどのように行われているかということに対する基本的な知識を理解することができたようです。先生のお話からは、聴皮質における音に対する反応を記録する際の先生のご苦労がうかがわれました。特に、聴皮質における神経活動は、麻酔薬であるペントバルビタールを用いると記録できなくなってしまうため、やむをえず無麻酔で実験を行ったこと、またそのために学会誌に投稿できなかった経緯などはとても印象に残りました。

また、実験に取り組む先生の御意欲、探求心にも大変感銘を受けました。近年はいろいろなものが便利になり、自分で何かを創作したり、工夫したりすることが少なくなりましたが、先生のお話を拝聴して、自分で作り出すという事の重要性を痛感いたしました。

最近では実験を計画する際に、何を知りたいかという事ではなく、これは新しいとか、誰もまだやっていないというようなことにとらわれてしまいがちでしたが、本質的な探求心を大切にしていかなければいけないと反省いたしました。

また、機会がありましたら、先生の実験のお話をお聞かせください。（文責：越智健太郎）

中野雄一教授

平成8年5月16日

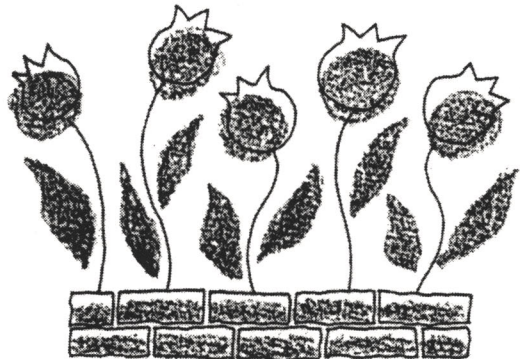
平成8年5月16日の午後6時より医学部第1ゼミナール室において新潟大学耳鼻咽喉科の中野雄一教授によるご講演が約1時間行われました。演題名は「中耳炎と乳突蜂巣」でした。

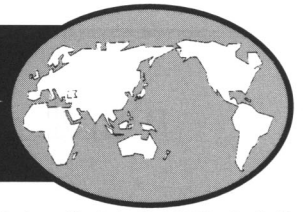
中野教授は中耳炎症性疾患、なかでも真珠腫性中耳炎の研究をライフワークとされており、その内容は基礎から臨床的研究、手術療法に至るまで真珠腫に関する総合的研究者です。先生は自他共に認める日本の第一人者ですが、特に乳突蜂巣発育に関する基礎的研究や、真珠腫の再発予防に重点を置いた鼓室形成術（乳突充填鼓室形成術）の開発に関してはイスラエルのSadé教授やデンマークのTos教授をはじめ、海外の第一級研究者にも高く評価され、影響を与えています。

今回の講演では、まず耳手術の歴史、乳突単削開術から鼓室形成術までの歴史的経緯について解説されました。ついで、X線撮影から矩形面積法

で含気蜂巣発育を計測し、ヒトの正常乳突蜂巣発育と滲出性中耳炎や真珠腫性中耳炎など中耳炎症性疾患の影響について話されました。引き続き、ヒトと形態が極似するブタの側頭骨乳突蜂巣を用いた実験について、耳管機能不全があると蜂巣発育が抑制されることや、実験的中耳炎によっても含気された胞巣が作られなくなることを示されました。講演の最後に、いま耳科学会でもっともホットな話題となっている乳突蜂巣のガス交換の可能性に関する基礎的データをやはりブタを用いた実験から教えていただきました。この問題は耳手術の術式に大きな変化を起こす可能性があり、注目されているテーマです。

講演終了後、学内のレストラン飛鳥において懇親会が催され、会場では臆して質問できなかった若い先生たちがアルコールの助けを借りて追加質問していました。市内下平間から来てくれた藤岡先生や私にとっては新潟時代の恩師であります。久しぶりでしたので引き続いての二次会にお誘いしましたが、まっすぐホテルに戻り仕事をしたいと断られました。相変わらずの勤勉ぶりに改めて感服した次第です。 （文責：高橋 姿）





帰国報告

カナダ留学記

越智健太郎

平成5年9月から2年間カナダ、アルバータ州のカルガリー大学 Jos J. Eggermont 教授のもとに大橋教授、竹山名誉教授のご高配にて留学しました。

カルガリーは冬季オリンピックが開催された地として有名ですが、カナダの西の玄関口であるバンクーバーからカナディアンロッキーを越えたところにある都市で、バンクーバーから飛行機で1時間、車でおよそ1000km、10時間くらいのところにあります。そばにはバンフ、レイクルイーズ、ジャスパー、カナダスキスなどのカナディアンロッキーの代表的な観光地があり、たくさんの日本人が毎年訪れています。北緯51度07分、西経114度01分に位置し、東京の北緯35度42分、東経139度46分と比べるとかなり緯度が高く、距離にして7990km離れており、時差も15(16)時間あります。月別の最高平均気温は東京の最低平均気温とほぼ同等で、最低平均気温はそこから約15度低いので、12-2月の最低気温の平均は-15度と、かなり冬の寒さの厳しいところでした。標高も1077mと高く、そのためか気候も激しく5℃くらいあった気温がいきなり次の日に-25℃という事もありました。反対にチヌークという風が吹くと-25℃くらいあった気温がいきなり次の日に5℃ということもありました。冬は厳しいのですが、夏は乾燥しており、温度が上がっても大変過ごしやすいところでした。

家は大学から歩いて20分くらいのところにある外国人や学生がたくさん住んでいるタウンハウスで、冷蔵庫があるだけで電気製品を揃えたり車を買ったりすることから始めなければなりません。それでも、どうにか1週間ぐらいのうちに生活を安定させることができました。

留学先はサイコロジーの教室だったのですが、日本で言う心理学とは少し違い、脳における知覚

に関する研究をしており、臨床と私が属した基礎(動物実験)グループ(彼らはニューロサイエンスグループと呼んでいましたが)がありました。大学は休みが多く、学生は9月から3月まではいるのですが(その間もクリスマスの1週間前から1月の第2週まで休み)、4月から8月は特別に早く卒業したい人だけが勉強しているようでした。おのずと教官もその間しか授業がなく、他は研究を行っており、臨床と研究を同時に行わなければならない日本の医者との生活とはかけ離れたものがありました。

実験は、ネコの聴皮質から反応をとることで、私のテーマは耳鳴りを引き起こすことで知られている薬剤(アスピリン、キニン)を投与した際の聴皮質の神経活動の変化を単一ユニットで自発放電数、自発放電パターン、いろいろな音刺激時について検討することでした。これを明らかにすることで耳鳴りのメカニズムを解明しようとするものでした。丸山先生のお話にもあったように聴皮質から反応をとることはかなり難しく複雑なことでした。実験は朝8時から始まり、しっかりした反応がとれ始めるのが12時頃で、私の実験が始まるのは6時以降で、終わるのはだいたい0時頃でした。幸い実験は順調に進み2年間で薬剤(アスピリン、キニン)による変化にある程度の結果をえることができました。

カナダの実生活で感じたことは、カナダ人がとても親切で、特に小児などの弱者をいたわってくれるので子供を連れていた我々はとても助かりました。また、香港の返還問題、また同じ英連邦のためか中国人の移住者がとても多く、目立つこともなく、人種的な差別を受けたことはほとんどありませんでした。

カルガリーは冬は朝の9時を過ぎても暗く、夕方の4時には暗くなってしまいます。私は冬に主として実験をしていたのであまりできませんでしたが、そういった時カナダ人は暖炉に火をいれて胡桃やいろいろな種類のナッツを食べのんびりと時間を過ごすようです。反面、夏は4時には明るく

なり、10時過ぎまで明るいのでつい睡眠不足になりがちでした。余裕のあるときは、代表的かつ古典的なカナダの食事であるパーベキュウを、ベランダで冬季オリンピックのジャンプ台、遠くにはカナディアンロッキーを見ながら食べたりしていました。ゴルフも天候が許せば週に1回、家からおよそ100km離れたカナナスキス・ゴルフクラブを拠点としてやっていました。料金はカート利用料金込みで3000円程度で、また朝1番でやっていたため午前11時頃には家でくつろいでいました。今考えると、渋滞の中を高いお金をだしてやる日本のゴルフとはちょっと違うスポーツのような感じがします。スキーは何回か行きましたが、寒すぎてあまりお勧めできません。

少し脱線してしまいましたが、臨床と並行して研究をするのは時間的にも体力的にもかなり制限があるので、こういう点で留学中の2年間は研究に専念できてとても有意義であったと思います。また、基本的には土日は休みなので、時間的にも余裕があり、論文を読んだり、自分でいろいろ考えることができ、その間に考えていたことを今、臨床に応用したり、また実験に役立てたいと考えております。

イギリス

近況報告

ロンドン大学

岡田 智幸

あれは、懐かしい70年代後半に結成されたグループである、Simply RedのFairgroundという曲が5週連続で、Top of Pops (BBC 1のTV Program)



のナンバーワンに輝いた一年前の10月15日夕方のことでした。私がLondonのホテルに到着したのは。

困難極まりないといわれていた英国への入国も、各方面の人々からのご心配をよそに難無く済ませ？2年の入国許可を御旗に、荷物が重いのも忘れ、颯爽とTaxiに乗り込み、黄昏ゆくLondonの街並みを見ながら、これがLondonか（実は二度め）と感慨一入でした。

そう、あれから、もう一年以上も経つわけですね。

私の所属しているところはMRC (Medical Research Council)、Human Movement and Balance Unit, Section of Neuro-Otology, Institute of Neurology, National Hospital for Neurology and Neurosurgeryで、この母体となるのがUCL (ロンドン大学=University College London)です。UCLには時の宰相伊藤博文や山縣有朋、文豪夏目漱石らがいたとされ（聞いた話で、確認は未だできておりません。どこにあるやら石碑があるそうです）、また、あの映画「ラスト・エンペラー」のなかで、愛新覚羅溥儀の、教育役であるジョンストン（「アラビアのロレンス」で有名なピーター・オートウールが演じた）も、そう言えば、後にUCLのProfessorになったんでしたっけね。

さて、私のいるMRC、Human Movement and Balance Unitはその前身であるHearing and Balance Unit時代に教科書にその名が出てくるDix, HallpikeそしてHoodを輩出したところ。現在、3人のhead (Gresty, Barnes, Rothwell)がおり、各国からの留学生を受け入れて大所帯となっております（日本人留学生も現在6名。耳鼻科では岐大の伊藤先生、青木先生そして私です。）さらに、この地Queen SquareにはNational HospitalのProf. Marsden (Parkinson病のtycoon)、Neuro-OtologyにはProf. Luxon, Rudgeそして私のBossのBronsteinといったconsultant doctorの超大物が大勢ひしめいています。各国からの留学生もこういった人々からの刺激を求めてやって来たんでしょう。私もその一人ですから、他のlaboの留学生の研究の被検者になったりして交流を深めてい

ます。

私の日課ですが、Bronsteinと共に週一回のNeuro-Otologyのclinicに出ています。BSL(ポリクリ)の学生より、一寸まともな程度です。また私の今回の留学のmain themeであるperception実験もようやく軌道に乗って参りましたので、目下これに勤しんでおります。毎日が益々楽しくなって参りました。これも加藤主任教授を始め、医局の諸先生方のお陰だと感謝しております。明日への新たな発展と成果を期待しつつ、Bacharach二度めのOscar受賞曲「Best That You Can Do」を聴きながらペンを置くことにします。

カナダ

近況報告

カルガリー大学

釵持 睦

私も家族は1995年9月より、カナダ国カルガリー市に来ております。私の研究課題である聴覚生理学を学ぶため、カルガリー大学区にて聴覚神経科学者であり、我々にとっては神様の様なかたであられるJos Eggermont先生の下、先生が以前より続けている聴覚脳神経からの反応から耳鳴りについてのメカニズムを探る研究の手伝いができ、とても光栄な日々を送っております。

また研究はもとよりEggermont先生夫妻と家族ぐるみの充実した生活を送ることができ、昨年の先生のご自宅でのクリスマスパーティーでは、先生自身の手料理をいただいたりと、数々の素晴らしい思い出を作っています。この様な経験も、加藤

主任教授をはじめ、大橋教授、越智先生の御指導、御指示があり、そして医局を切り盛りされている岩武先生や諸先生方の厚い御支援のおかげによるものと、誠に感謝しております。

この度、私の近況報告との依頼がありましたが、研究についてはこれから論文に取り組むところで、今回はここ、カルガリーについて書きたいと思います。

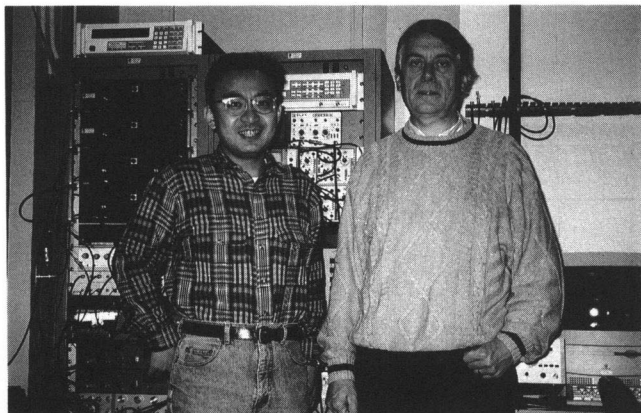
カルガリーは、カナダの西海岸からロッキー山脈を越えた地表1000mのところの内陸にあり、一年を通じてドライで、緯度は日本の北海道より上に値するので、冬の寒さについては想像がつくことと思います。こちらに来てマイナス30度を体験して、初めて寒さというものを知った気がします。

このような環境の中で私は、日本では絶対にないだろうという現象に何度も遭遇しました。例えば、せんべいなどの菓子の袋を開けたままにしておいても湿ることがなく、逆に乾燥しすぎて堅くなってしまいます。また、夏と冬の気温の差が、50度くらいあることにも驚かされました。特に冬には、シヌークと呼ばれる西海岸からの温暖な風がロッキー山脈を越えてやって来て、カルガリーの冷気を吹き飛ばしてくれることがあり、これが、一度やってくると気温マイナス20度を越える寒い朝が、一気にプラス10度くらいまで上がります。そのような時は、セーター、スキーコート、毛糸の帽子にマフラー、ブーツと完全防御の出で立ちで朝通勤している人たちが、Tシャツ一枚で歩いて帰れるのです。

こちらの人に言わせても、ここの天気は「クレイジー」の一言だそうです。

夏は日出の気温は関東地方と同じくらい上がり、太陽もサンサンと照るのですが、日陰は涼しく過ごしやすいためクーラーは必要ありません。朝夕はジャケットが要り、清々しく、山や高原の空気を感じます。とにかく、夏は素晴らしく美しく、冬が長いだけに皆、夏を愛して思い切り行動しているように思えます。

これらの体験をしてみたい方はぜひ、次にここへ留学して味わってみてはいかがでしょうか。これにて私の今回のカナダ報告を終わらせていただきます。



関連病院 紹介

横浜総合病院

横浜総合病院は昭和51年12月に開院した、まだ若い病院です。横浜市青葉区というベッドタウンに位置していることもあり「地域に密着した中核病院」としての体制作りに取り組んでいます。全21科、病床数300床の規模を持ち、救急医療体制やICU・人工透析などの設備を備えています、さらに老人保険施設「横浜シルバープラザ」を関連施設として高齢化社会に対応すべく力を入れ、特別養護老人ホーム「緑の郷」を医療面でバックアップしています。地域に密着した医療を目指す、その一つに「プロムナード」の発行があります。これは病院が患者さんに向けて発行している広報誌で、外来診療表やDr.プロフィールなどを中心としたものを月に1回発

行しています。

耳鼻咽喉科は平成6年度より大学医局から菅野先生（現在は開業）が部長として着任し、その後平成7年度より2人体制で診療を行なっています。外来は月・火・金は午前・午後、水・木・土は午前のみの診療となっています。また火・金曜日の午前に高橋助教授、火曜日の午後に肥塚講師に外来を手伝っていただき、特殊な疾患に関して専門的な診療を行なっています。手術は水・金曜日の週2回で副鼻腔炎、扁桃腺炎、ラリngoマイクロサージェリーが主な疾患ですが、月に2回程度の割合で大学より高橋姿助教授を招いての慢性中耳炎の手術も行なっています。（文責：荻野貞雄）



積仁会島田総合病院

沿革 昭和12年5月、銚子市馬場町に現名誉院長であられる嶋田隆先生が開業し昭和22年9月に現在地（銚子市東町）に移転しました。昭和41年外科、昭和57年産婦人科、昭和59年眼科、耳鼻咽喉科を開設し昭和60年4月に総合病院の認可を受けました。病床数は200床で銚子市の中核的病院の一つとして一次及び二次医療を担っています。昭和59年9月より聖マリアンナ医大から常勤医が1人ないし2人診療に携わっています。

現況 平成8年4月より常勤医は矢崎1人となっており、②⑤⑥⑦は非常勤医が1人ずつ来院しています。手術は主に③④⑤の午後で行っており、手術以外は外来となっております。当院の外来患者の特徴は、漁港に近いため遠方よりの船員が多いこと、魚の消費量が多いため魚骨異物が多いこと、また近隣の市町村に開業医が少ないため遠方より通院される患者さんが多いこと、などがあげられます。外来の

平均患者数は約100人です。主に慢性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎、慢性中耳炎、滲出性中耳炎、などの良性疾患です。悪性疾患は近くにある旭中央病院などに紹介します。入院患者は月平均7人で手術の患者さんを除けば突発性難聴、めまい、顔面神経麻痺、扁桃周囲膿瘍などの急性疾患が多いです。手術は主に、副鼻腔炎、扁桃炎、アデノイド肥大、声帯ポリープなどを行います。チュービングなどの外来手術も積極的に行っております。

（文責：矢崎裕久）



耳鼻科スタッフ一同

- ① 矢崎医師 ② 尾谷医師（非常勤） ③ 鈴木さん
④ 柳堀さん ⑤ 宮城主任さん ⑥ 山崎さん
⑦ 並木さん



新人紹介

平成7年度入局

富澤 秀雄

平成7年はスギ花粉飛散量が例年になく多い年だった。平成7年3月某日第89回医師国家試験初日。試験開始時間が刻々と迫り、こみ上げる緊張感、流れ出る鼻水（私はアレ鼻）を押さえきれずにいた。午前9時30分、緊張したまま試験は開始された。2日目を迎え、緊張感はおさまったものの鼻水は依然止まる気配を見せず、卓上はちり紙の山となっていた。気付いてみれば、試験は終了し、帰宅の途についた。翌朝遅い時間に起きてテレビをつけたところ救急車、消防車、慌てふためく人々が映っていた。あの地下鉄サリン事件だった。いま思えばこれが国試直前、最中だったらと考えるとゾッとしてしまう。そんなこんなでも国試合格を果たし喜んでいた。

しかし喜んでばかりはいられない。私にはまだアレ鼻が残されている。これは当耳鼻科へ入局した私の今後の課題の一つである。まずは来年のスギ花粉の量が多くないことを祈る？

服部 康介

私は平成7年5月に入局しました。入局後、本院及び西部病院にて研修医として勤務しておりました。本院では、腫瘍班、喉頭班にそれぞれ4ヶ月所属しておりました。昨年（平成8年）は、ローテーションとして麻酔科4ヶ月、救命センター3ヶ月計7ヶ月他科に出て、今後耳鼻科医としては、まず経験しないであろうと思われる症例を見てまいりました。本来私の目標は おたく になる事でありまして、本年、平成9年よりは、まずその第一歩である大学院への進学を志しております。これからは、自らの決めた専門分野を自分の「武器」とすべくその

基本を修得する事を指すとともに、狭い視点に縮こまらない様、広い知識を取り入れて行ける様、努力して行きたいと考えている次第です。

田中 健二郎

平成7年度に入局した田中健二郎です。早いもので2年間の研修もあとわずかとなってしまいました。父が耳鼻科医ということもあり、何となく耳鼻咽喉科に入局したというのが本音の所だったのですが、実際に臨床の場に立ってみると、額帯鏡、耳鏡、鼻鏡、間接喉頭鏡、ファイバースコープというような耳鼻咽喉科特有の器械を使い診察、治療することの難しさ、面白さが分かってくるようになり、とてもやりがいのある分野だと思えるようになりました。また、自分が治療している患者さんに「良くなってきた」「治った」と言われると、ほっとすると同時に充実感が湧いてきて、やってて良かったなとつくづく思います。まだまだ患者さんから教えられることも多く、自分の知識の浅さ、手技の未熟さを痛感する毎日ですが、これからも自分なりに頑張っていこうと思っています。

尾谷 良博

早いもので聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科に入局して2年が過ぎ研修期間も終わろうとしています。医師になる前からよく「医学部での医学の勉強と臨床は違う。」とか「入ったばかりの医師は、臨床では全く使えない」とか良く聞いていました。実際そう思う所もありそうでないと思う所もありました。自分が、他の人々、先輩方よりどう思われていたか今どう思っているかはわかりませんが、自分なりに頑張ったつもりではあります。研修を終えて3年目となって今の自分が今までの自分とどう違うのか、どう違っていくのかそれは自分ではわかりませ

んしどうなっていくかもわかりません。ですが、医学部において努力した事入局した事が決して無駄にならぬ様に、医師になれた時の新鮮な気持ち、そして常に世界を見れる向上心を忘れず頑張っていきたいと思っています。

平成8年度入局

俵道 淳

高校を卒業し東京で浪人を始めた時からはや8年の月日が流れ、やっと手に入れた菅直人厚生大臣の名前入りの医師免許状は"いい紙使ってる"と感心すると同時に"6年間コイツのために・・・"と思うとなかなか感慨深く重みのあるものだった。そんな思いに浸っていたのも束の間、耳鼻咽喉科での研修医生活がスタートした。学生時代とは一転した生活であり、当時荒んだ生活に触まれていたため、社会人の生活に慣れるのがまず第一歩といつて調子であったが、さすがに8ヶ月が過ぎ仕事にも少し慣れた今日この頃である。耳にもなんとか光が入るようになり、医局旅行で"もしも鼓膜が見れたなら～"(もしもピアノが弾けたならby 西田敏行)を歌っていた頃と比べると少しは成長したような気もする。しかし、今から勉強することがほとんどであり、僕なりの素朴な疑問にどうぞ御指導の程よろしく願いいたします。

西野 裕仁

初めまして、平成8年組の西野裕仁です。入局してすぐに西部病院に配属され、通勤するのが面倒くさくて、当直室に寝泊まりしていました。シャワー・冷暖房・食堂・駐車場あり、横浜近し、となかなか快適に過ごせました。ルームメイトの大将も気さくな方で、GOT・GPTの値を気にしながらも、毎日楽しく2人で飲んでいました。よく富澤先生も飲み会に引きずり込んで、当直の日でもないのに、

3人で病院に寝泊まりしていました。西部病院では飲み会だけでなく、学会発表もさせていただきました。赤尾先生の厳しい御指導のもと、芋川先生、富澤先生に手伝っていただき、なんとか無事に(と自分では思っています)終了することができました。アットホームな雰囲気の中、メリハリがあった西部病院、医者としての第1歩目にお世話になった先生方には本当に感謝しています。これからまたいろいろな先生方にご迷惑をかけながら、一人前になっていくことと思います。どうか見捨てずに、御指導の程よろしく願いします。

小林 健彦

初めまして。私の出身は東京都町田市で、大学から比較的近くの出身であります。日本大学第三高校卒業後、聖マリアンナ医科大学へ進学し学生時代の6年間を過ごし、今年入局となりました。学生時代より自動車が好きで整備をしては、夜中ドライブへ行ったりしていましたが、最近では患者さんを診察する手前、オイルで手を汚すこともめっきりと減ってしまい少し残念に思っています。

車の整備も人間の病気の診察とにているところがあって1つ1つ調子の悪いところを探って故障しているところへたどり着くという作業がありますが、人間の場合は調子の悪い場所を見つける難しさ、特に耳鼻咽喉科の場合他科よりも手技的なコツを要することが多く入局して改めてその難しさを感じました。今後もいろいろな疾患を診て勉強していきたいと思っています。まだまだ若輩者ですが宜しく願いいたします。

桑原 大輔

平成8年5月より耳鼻咽喉科にての研修医としての生活がスタートしました。今までの生活(医師国家試験に向けての受験生としての)とは全く異なる、一人の医師としての生活です。耳鼻咽喉科とは実際にはどのようなことをしているのだろ

う？BSLである程度のことは見ているにしても、実際に働くと言う事はどんなことなのか？医師としての自覚とはなんぞや？などなど入局するまでは、いろいろな不安や躊躇いもありましたが、いざ働きだすとそんなことは考えている余裕もなく、目の前にあるやらなければならない事を一つ一つ処理していくのが精一杯の日々です。生まれつきおっちょこちょいな自分を知っているだけに、一つ一つ確認してやっているのですが、まだまだ足りないところやケアレスミスがあって、諸先生方々にはご迷惑をおかけしております。まだまだ今後もご迷惑をおかけするとは思いますが、御指導、御鞭撻のほどよろしく願いいたします。

木村みすず

今年入局いたしました木村みすずです。よく学生の頃より、医者は体力が必要と聞いてきました。私は大学6年間空手をしていたのですが体力がなく、入局前はちゃんと仕事をやっていけるのかとても不安でした。しかし、先生方をはじめ医局の方々は優しく、今まで数回倒れましたが楽しく人並みに仕事をしています。

先日、私は初めて演者として地方会に出ることになりました。たくさんの先生方にいろいろ教えていただき協力してもらい、改めて自分が恵まれた環境にいることを実感いたしました。そしてその地方会ですがとても緊張してしまい、なんとか発表したものの質疑応答の時はパニックになり自分が何を言っているのか分からず、また先生に助けていただきました。まだまだ世話がやけると思いますが頑張りますのでよろしく願いいたします。

宮本 康裕

今年入局しました宮本康裕です。和歌山県和歌山市で生まれ育ち高校を卒業した後、大学から神奈川県民（マリアンナ市民？）となりました。学生時代は柔道部に所属しておりました。なぜ柔道部に入部したかは未だに定かではありませんが、しかしそのお陰で、耳鼻科には柔道部の諸先輩方々が、多数在籍しており非常に良かったと思います。

入局したての頃は、まず病棟業務の点滴当番が一番の苦痛でした。患者さんに慰め励まされながら覚えていくことが出来ましたが、また、額帯鏡を上手く使うことが出来ず鼓膜と耳垢の区別も付かなかったことを思うと少しは進歩したのかなと思う今日この頃です。まだまだ未熟者ですが、これから日々精進していきたいと思っておりますので、御指導御鞭撻の程宜しく願いいたします。

大塚崇志

はじめまして。私の出身地は埼玉県所沢市です。近くに防衛医大、航空記念公園、西武球場等があります。市立城北高校、聖マリアンナ医科大学卒業後、国試浪人を1年経て聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科の研修医として採用していただきました。いきなりですが私はかな～り変な人間です。今はまっていることは、物を作ること（木工・陶芸等）、絵を描くこと、PIANOを弾くこと（F. Chopin, Ludwig van Beethoven, Michel Nyman, 加古隆など）、楽しくお酒を飲むこと、おいしい物を食べることなどです。趣味に関しては欲張りで貪欲です。これからは徐々に医学に励んでいこうと（眠らずに…）考えています。医者として、また人として、人に頼られる人間を目指し、ねばっこ～く生きていこうと考えています。私自身病院の中では医者として母親の胎内から出てきたばかりの赤ん坊のような存在ですが、どうぞよろしく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

新婚さん：妻を語る、自分を語る

● 芋川 英紀

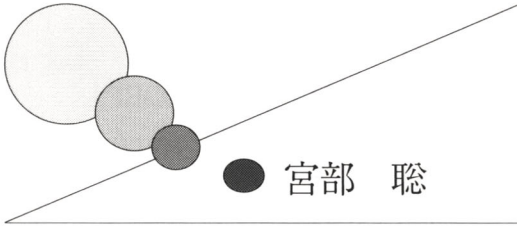
あまりに漠然たるお題を頂戴し、何ともはや何をどう書いて良いやら悪いやら、全く困っている。結婚生活を全くありのまま記述すれば、ある人は、のろけと受け取るであろうし、またある人は真に同情してくれるであろう。そこで今回は、私の恋愛論と結婚感について僭越ながら文章にしたためてみたいと思う。恋愛とはなにか、愛とはなにか、まさに古きはギリシャ時代、また本邦においては、源氏物語に始まり、そして新しくはドラマのロングバージョンにと、数限りないまさに永遠のテーマである。私も世間並みに生まれてこのかた幾つかの恋愛と呼ばれるものを経験している。一目あったその日から夜も眠れず、といった情熱的なものもあったし、同情が友情にそしてそれがより深い感情へと変化していったものもある。はたまたわゆる一時の過ち的な（一夜の過ち方が多かったが）ものもあっ

た。そしてこれらの経験から得た結論は、恋は常に一時の幻影で、必ずや滅び、醒めるものである。ということであった。きっと私より人生経験の長い先輩たちは、そんな当たり前のことを、とお思いになるに違いない。そして若い人はそれについては、ただ聞き承れば良い、といった程度の理解でよろしいかと思う。先人の若い人に対しての教訓としては、二とおりがあって、先輩が失敗したから後に続く人がそれを繰り返してはならぬというものと、先人が過ちをおかし、若い人も必ず失敗をおかすであろうが、しかしながらそれを禁じるわけにはいかぬ、という二つがある。こと恋愛については後者的な要素であると私は理解している。しからば結婚についてはいかに、と問われるならば、その答えは私にとっては全く未知の世界である。私にとってその答えは私が読んだ数少ない古今東西の恋愛文学のなかと、週刊誌の見出しのなかとでの漠然たる理解でしかない。何人か親切で正直な人が、私にこの答えを教えて下さるか、それとも時間という何よりも有り難い存在が、それをおのずから私に教えて下さるのか、はなはだ不安なところである……。なんていっぱしの哲学者が尤もらしく評論するような文章

はさておき、結婚するというのは、はなはだたいそうそれはもう大変なことをごさいますて、特に私めのように、三十過ぎまで、家財道具はせいぜい布団と、洗面道具だけ、おまけにやや先天的に放浪癖があり、半分住所不定、というやめ暮らしが長かった者にとっては、それは何とも妙であります。何か妙と言ったって、いつも同じ所へ帰る、それ自体私めにとってはやや異常事態でありまして、そこにいつも妻なる異性が存在していること、さらにはその異性は、なんの恥じらいもなく時にパンツ一枚で私めの前を横切ったりいたします。世間様のおっしゃるには早晩、これに子供なる乱入者がいつのまにか加わるとのこと、そこまでいくともはや私には、良い悪いなぞと言ってはお



られぬわけでありませう。とにもかくにも結婚とはまさに私にとってはまさに驚くべき世間の習慣と感じる今日この頃であります。



まず、妻について紹介させていただきたいと思ひます。名前を宇美と書いてひろみと読みます。名前のエピソードですが、ソ連で世界初の女性宇宙飛行士が飛行した年に生まれた事から、命名されたそうです。会社ではウミちゃんと呼ばれてます。宇宙とあまり関係ないのですが、現在全日空に勤めてます。会社によりスチュワーデスの呼び方が違うようですが、ANAではCA（キャビンアテンダント）と言っています。国内線（ドメス）ですので学会などで搭乗の節はCAのよく行くおいしいお店などご紹介できるかもしれません。患者にもいろいろな人がいますが、塔乗者にもいらしゃるようです。プロゴルファーのJさんは通常はスーパーシートを利用されているようですが、スーパーシートのない路線で

は決まってドアの前CAと向かい合う席にしているようです。気に入ったCAには食事に誘ったりしているという噂です。搭乗手続きの時足を伸ばせる席にして下さい、とリクエストすると、ドアの前の席になるらしいです。JALは国内線ほぼ全席禁煙なので喫煙家の先生はご利用下さいと申しておりました。ANAの国内線の業務パターンは3日間働いて2日間休暇、3日間働いて1日休暇、このパターンの繰り返しで業務しています。3日間の業務の内、始めの2日間に地方のステイが多く、月に7~8日ステイがあります。今、私は大学でお世話になってますので、当直を宇美のステイ日になるよう、当直日の変更をみなさまにお願いしたりしています。結婚式は平成7年11月に加藤教授御夫妻のご媒酌により椿山荘フォーシーズンズホテルで披露宴を挙げさせていただきました。私の両親も椿山荘で結婚式を挙げたということもあり、ホテルを選びました。大勢の方に出席していただき大変いい思い出になり、感謝しております。宇美は杉並出身で、私と4才違いです。学生時代はバトミントン部で、得意な科目は音楽と体育だったそうで、性格は陽気で明るいタイプだと思います。自由奔放なところが好きです。やはり自分に欠けた部分に魅力を感じるのだと思います。友人にはおっとりしているところが似ていると言われている。私自身の性格で欠点だと思うところは、積極性がないというか、現状に満足して

しまう性格を少しでも矯正したいのですが、なかなか難しい状況です。今後も明るく頑張りたいと思います。2人の共通の趣味はスポーツではゴルフ、スキューバダイビング、旅行、お酒などで、みんなで楽しくできる集まりが好きなので鍋パーティーなど企画できたらと思っております。ユーモアのある文章が書けませんが申し訳ございませんでした。今後ともよろしくお祈りします。



私が釣りを始めたのは小学校の時に近くの池(猫ヶ洞といったと思う)でカエルの腿でアメリカザリガニを取ったり、鮒や雷魚を釣ったりしたのが最初だったと思う。高校生になって以来釣りとは疎遠となっていたが、大学5年の時に斎木さんと仲良くなり、その関係で当医局のOBの岩澤寛先生や産婦人科の村井邦彦先生らと知り合ってから(もちろんこれらの先輩方とは面識はあったが)よく釣りにいくようになりました。当時は仲間内でプレジャーボートを持っていた人が何人かいて(岩澤先生もその一人であった)、その船で相模湾や東京湾へよく釣行し、魚を釣るだけでなく釣ってきた獲物を食べるのが一番の楽しみであった。入局してからも岩澤先生や五島先生、木下先生たちと釣りを楽しんで、最近では、大橋教授や芋川先生たちとも一緒に釣行しています。

釣りの楽しさというか良い点は!何もかも忘れてボーッとできる。”糸を通しての魚との対(といたらカッコよすぎるが)、というかあのビッと来る感触と魚が掛かってからのやりとりのおもしろさ。釣ってきた魚をさばいて食べる楽しみなどが挙げられると思います。逆に欠点は!特に船釣りに限っては、船酔い(私は船に弱い!!よく船酔いをし、マグロになっています|口の悪い奴はゾウアザラシともいうが・・・)。”何も釣れなかった(俗称;ボウズ)時のむなしさなどがあるが、その欠点を差し引いても楽しいものであり、今では私のストレス解消法(時々逆にス

トレスになる事もあります・・・)のひとつとなっています。

この間、メジマグロ(ホンマグロの子供)を釣りに行きましたが(with大橋教授・木下先生・芋川先生他2名)、メジの他、シイラ、平目、イナダ(ブリの子供・これは大橋先生が釣りました。)、カモメ(俗に凧上げといいます)などが釣れ、大変楽しく、又、大変おいしく頂きました(ちなみにカモメは食べられません!)

最近ではOut Door BoomでGame Fishingとやらが流行し、木○拓○や糸○重○などの芸能人にも釣りが流行っており、Catch and Release(Black Bass etc.)がもてはやされていますが、私は釣った魚は食べてやらないと成仏できないと考えCatch and Eatを心がけています。

釣りに興味のある方は声をかけて下さい。みんなでおいしい魚をたくさん釣りましょう!!



学会デビュー

初めての全国学会・国際学会の印象

Piacere. Mi chiamo
Atsushi Sakuma !

佐久間 惇

今回は国際学会デビューというテーマでの原稿依頼。

私の記憶が確かならば、あれは1994年の春だったと思う。Kat教授より、「S医科大学の一、S教授が一、今度箱根で国際学会を開くので、誰か演題を出してほしいと言うんですけど、さーくまさん、どーですかー（演題をだしなさいという意味）」とのお言葉。あいにく、それといってネタがなかったのでやんわり断ったつもりが、OKと受けとられてしまい、エントリーする羽目となった。国際学会は、はっきりいって好きではない。まず第一に、英語が読めない、聞き取れない、話せないの三重苦。さらに、1992年の東京で行われた第17回バラニー学会においては、共同演者I先生の発表を聞くためちょっとのつもりで立ち寄ったところ、美人受付嬢に「参加費5万円です。」と事務的に言われた。このときばかりはさすがにわが耳を疑ったが、洪々と5万円を支払い、立派な革カバンを代わりにいただいた。バブル時代のためか、会場が芝公園の東京プリンスだからなのか、それともこのカバンが高級なのか知らないが、当時の感覚からしても高い出費であった。高い参加費を取られた上に、異邦人にたしなめられた日にはたまったものではない、というのが頭から離れず今まで国際学会から逃げてきたのである。

しかし、自分の意志に反しサイ(サジの方がよいか)は投げられてしまった。かくして、初めての国際学会、XXIInd Congress of the International Neurological & Equilibrimetric Society に向かってスタートすることとなった。

前述のように自分自身ネタがないので、演題の内容は長年同僚のOgi先生が研究していたものを拝借した。スライド原稿は、Windows3.1アプリケーションソフトで作成し、ディスプレイ画面をそのまま写真に撮るといふ、化石的手段で仕上げた。医局にはまつきんとつしゆなる器械(奇怪?)があったが、自称「まつくは嫌い」なので、意地でも使わなかった。というのはウソで、システムの不安定さが災いしたのか、まつくの悪口を言ったためか、仕事途中で爆弾マークが出て自爆されたのである。まつくの悪口を言うと、いざというときに反撃を食らうので、皆さん医局のまつくを可愛がりましょう。Koi先生のように自称「まつくは使わない」とでもしておけばよかったと、後悔・後悔・後悔役に立たず。

月日は流れ、1995年4月。箱根・山のホテルでXXIInd Congress of the International Neurological & Equilibrimetric Society が始まった。データ主のOgi先生を車に乗せいざ出陣とあいなった。平日の箱根はとても閑静で、箱根は平日に限ると二人で会話しているうちに小涌谷の宿に着いた。学会参加費が高い上、会場ホテルの宿泊費もばかにならないので、少しでも旅費を浮かすために隠れ宿に身をおいた。医局OGのSog先生のかはらいで、某団体の保養施設を紹介してもらったのであるが、これがまた立派。マ*ア*ナのと一流企業の厚生能力の差をまじまじと感じてしまった。通された部屋には、角部屋で石造りの大きな内風呂があり、3つの和室を擁していた。大浴場で一風呂浴びてビールを飲むと、すっかり温泉旅行気分。こんなことではいけないとこれっぽちも思いもせず、学会会場に車を走らせた。

学会会場には外国の人の影もちらほらみられ、国際学会なんだという気分が盛り上がってきた。レセプションの席で、イタリア人と隣り合わせになった。当初彼らは、黙々と鉄板焼きを食べたいたが、陽気なOgi先生はセリエAの話を持ちかけた。たん、がぜん元気になった。ワインの話になるとも

う止まらない。アルコールがはいったイタリア人は本領発揮である。打ち解けたところで自己紹介、彼らはピサ大学の de Cicio さんと Fattori (服部ではない!) さん。"My name is S***o Ogi**." Ogi 先生はろれつが回らない。今度は自分の番、"Piacere. Mi chiamo Atsushi Sakuma!". 脳ミソがアルコールで vertigo 状態なので、訳も分からず口から出てきた。これが自分自身初めて使ったイタリア語であったが、何となく通じたようでイタリア人が妙に身近に感じたのはこのときであった。とても楽しいひとときだった。イタリアにでも行く機会なんてあるわけがないのに、ピサに行ったらよりますよ、なーんて。まさか、数年後に本当に自分自身イタリアに行くことになろうとは。

ところで、発表はどうなったのかって? そんなことに興味をもって読んでいる人はいるんですか。発表は最終日の午後、しかも天気がいい、場所は箱根。それだけで十分でしょう。

それではまたの機会に。Arrivederci.

国際学会デビュー

朝倉 美弥

「朝倉先生、オーストラリアに行きましょう。」と加藤教授にお誘いを受け、はや2年の月日が経ちました。その当時は、2年もあればゆっくりデータを集計し、分析して苦手な英作文もきっとできるだろうと安易に考えていました。事の重大さに気付いたのは、今年春、済生会川口総合病院に一人体制の勤務となってからでした。二人でやってきた外来を一人でこなすことがどんなことになるか、わかっていたものの、やはり毎日が体力と気力の勝負でした。仕事を終えて帰宅後、バラニーのことはとにかく子供を寝かしつけてからやろう、などと思いがつく翌朝服をきたまま、電気がこうこうついた部屋で子供の横で寝込んでしまった自分に気が付く。優柔不断な自分に朝からため息をつく日々がどのくらいあったらうか。

そんな中、夜になると車を走らせ大学通いをし、自宅では苦手な Mac を目の前にして数日かかりでグラフ一枚を作り上げ、とやっとオーストラリア出発数日前にポスターらしき形となったのです。ポスターを貼ることはできそう、ところで私は英語で話ができるのかしら、と遅すぎた不安でしたが出発直前になってから狼狽し始めました。なんとかするしかない。いざオーストラリアへ。

8月10日、空港で加藤教授ご夫妻と山形大学の3人の先生方とお会いして出発しました。非常識と思われるかもしれませんが、こんなチャンスに一人で行くこともないと小学校2年の子供を連れて行きました。朝11時に離陸し到着した時にはもうすでに夜の10時、しかもオーストラリアは今は冬の季節。吐く息も白く、寒い。翌日から学会が始まりました。娘は教授の奥様のご好意で毎日バスツアーに連れて行ってもらい、ホテルに一人残すことなく観光を楽しんでいました。途中、高橋馨子先生が、遠路はるばるアメリカからやってきて合流しました。学会会場に一步踏み入れたとたん自分の顔がこわばってくるのを感じながら、自分の質疑応答の日程ではないにもかかわらず、ポスター会場にいてもロビーにいても落ち着きがなくウロウロ歩き回っていました。やはり緊張していました。権威ある学会とはわかってはいたものの、会場に采てみてから再認識し、とんでもないところに来てしまったと後悔しても時すでに遅し、でした。とにかく冷静になろうと必死でしたが、とうとうポスターの質疑応答の時刻がせまり、直前にわかったのですが、それはポスターの前ではなくスライド会場で行うというものでした。自分の名前が英語で呼ばれ、演者席に立つまでに心臓が破裂するのではないかと思うくらい緊張し、足は震え、頭の中は真っ白でした。結果はどうだったかという、ご想像にお任せします。

とにかく、私にとって長かったバラニー学会もやっと終りあとは楽しむばかり、おいしいものを食べて遊ぼうと思いきや、やはり緊張しすぎたのか胃をこわしてしまいました。少し食べ物を控えそれでも、この寒い中プールに入ったり、遊園地に行ったりコアラを抱いたり、満喫して帰国しました。最後に娘を連れての学会を快く承知してくださった加藤教授と奥様、ならび山形大学の諸先生方、肥塚先生、馨子先生に感謝いたしております。娘にとってレセプションの夜にオーストラリア人のベビーシッター

と英語もわからず過ごした事は、楽しい思い出となることでしょう。

全国学会デビュー

尾谷 良博

「尾谷さーん、私ねー、今ん度の一顔面神経研究会なー、発表出してみたいんですねー。」流暢な山形弁で加藤先生は私におっしゃいました。医局でみんなと話していた私は「はあーそうですか、それは素晴らしいですね。」とのんきにこたえていました。すると加藤先生は、たたみかける様に「そう思いますかハッハーン」とおっしゃっていなくなりました。当時、私は西部病院の方で勤務についておりましたので、まさに他人事、「誰がやるのかねー、大変だねー。全国学会だもんねー。」とボケておりました。しかし、平穩は風雲急を告げる、私の耳に、上杉先生の悪魔のささやきが聞こえてきました。「タッタッタニオ、お前顔面神経研究会、発表するらしいな。」私は「へっ」と言ったまま固まりました。そうです。その当時私はまだ地方会ですら発表をした事がなかったのです。まさに寝耳に水、馬の耳に念仏とはこの事で全く予期せぬ出来事に私は意識不明になりそうになりました。しかし、意識不明になってばかりはいられません。さっそく他人を巻き込むことにしました。ターゲットとなってしまったのは、そう次期医局長佐久間先生です。そういう所は調子の良い私は「先生、ちょっと質問があるんですけど。」とかなんとか言いながらすっかり共同演者に引きずりこんでしまったのです。やさしいやさしい佐久間先生は、「しょうがないなー、僕もおイタリアにお演題を発表しにいかねばならなくてそのおイタリアの準備大変なのよーん。」といいつつも自分の演題と並行して私の研究発表を手伝って下さいました。右も左もわからず何をしていいかもわからないわたしは、まさにロボット。これをやりなさい、と言われるがままやっておりました。『しかし』私は

重大なことに気がきました。そう私は全くコンピューターを使えなかったのです。つまり、コンピューターを使えないロボットだったのです。そうなると迷惑するのはやはり、やさしいやさしい佐久間先生、全て手とり足とりとなってしまいました。そしてやっと発表となりました。発表については、ここでは多くを触れませんが、加藤先生が「いやー、今日は尾谷、ブレイクしてくれてよかったですね。」という一言でみなさん全てを察して下さい。ちなみに私は、壇上で意識不明に何度もなりそうになった事だけ皆様にお伝えしておきます。

そんな訳で、どんな訳かわかりませんが一応無事発表を終えることができました。これもひとえに、佐久間先生のやさしさのたまものだと思っております。

最後に、貴重な発表の場をくださった加藤先生、当日、失神しそうな私を温かく見守って下さった高橋先生、肥塚先生、そして次期医局長佐久間先生、佐久間先生にはもう足を向けて寝れません。その他、ご迷惑をおかけした皆様、本当にありがとうございました。

最後に私の教訓を一つ、コンピューターをやれるようにしましょう。そうしないとロボットにもなれません。以上です。



平成8年 耳鼻咽喉科教室日誌

1月

- 1/29 第34回教室集談会
 宇宙医学 (Space medicine) における
 耳鼻咽喉科医の役割 肥塚
 イタリア、デンマークにおける耳手術の現状 高橋
 血小板凝集能からみためまい疾患 加藤

2月

- Assoiation for Research アメリカ 肥塚
 in Otolaryngology
 2/29 新潟大学名誉教授 丸山直滋先生講演会

3月

- 第95回日耳鼻地方会 横浜 高橋、肥塚、服部
 3/15 大阪大学耳鼻咽喉科 久保 武教授講演会
 『大阪大学における人工内耳の展開』

4月

- 4/13~17 側頭骨手術研修 アメリカ 高橋
 4/29~5/3 第4回 SMRM アメリカ 肥塚

5月

- 5/10~11 第8回日本喉頭科学会 旭川 岩武
 5/16 新潟大学耳鼻咽喉科 中野雄一教授講演会
 『中耳炎と乳突蜂巣』
 5/23~25 第97回日耳鼻総会 福岡 高橋、肥塚、堤、越智、勝見、金子

6月

- 6/7 第7回神奈川県耳鼻咽喉科 横浜 佐久間
 頭頸部外科手術手技研究会
 6/13~14 第19回日本顔面神経研究会 東京 尾谷
 6/16~20 第24回国際聴覚医学会 イタリア 大橋、越智、吉野、木下
 6/22 第96回日耳鼻地方会 横浜 三井、新谷
 6/28~29 第58回耳鼻咽喉科臨床学会 名古屋 越智、服部

7月

- 7/6~7 医局旅行 伊豆
 7/11~12 第20回日本頭頸部腫瘍学会 福井 小松崎
 7/19 第7回耳鼻咽喉科と 東京 勝見
 老化の研究会

8月

- 8/12~14 第19回国際パラニー学会 オーストラリア 加藤、肥塚、朝倉

9月

- 9/1~6 第5回国際真珠腫学会 イタリア 高橋、佐久間

9/ 7	第97回日耳鼻地方会	本学	新谷、菊地、西野
9/12~14	第9回日本口腔咽頭科学会	那覇	鳥越、金子

10月

10/ 3~4	第41回日本聴覚医学会	京都	越智、木下
10/ 6	医局コンペ	富里GC	
10/17~19	第6回日本耳科学会	東京	高橋、越智、佐久間
10/24~26	第35回日本鼻科学会	仙台	上杉、越智、三井、宮部
10/30~11/19	共同研究 (Eye and Ear Institute)ピッツバーグ		肥塚

11月

11/14~15	第48回日本気管食道科学会	大阪	富澤
11/21~22	第55回日本平衡神経科学会	京都	加藤、肥塚、佐藤、荻野 朝倉、勝見、新谷
11/8~9	第34回日本神経眼科学会	東京	新谷

12月

12/12	第8回神奈川県耳鼻咽喉科 頭頸部外科手術手技研究会	横浜	岩武
12/14	第98回日耳鼻地方会	横浜	大塚、木村、宮本



編集後記

- 聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教室には四門会誌という竹山教授時代の同窓会誌がすでにありますが、これは定期的なものではなく、記念号的な発行でした。今回、加藤教授のご提案により年一の定期刊行物として本号を創刊しました。ただし、名称は四門会誌の名と号数をそのまま引き継がせていただきました。
- 本号のメインは荻野初代教授、吉川先生、小野先生による座談会です。聖マリアンナ医科大学も昨年して四半世紀が過ぎ、現教室員には誰も教室の開設期を知る者がいなくなりました。そこで無の状態から教室作りに努力された先生方のお話を伺いました。多くの興味深いお話をいただき3先生には深く御礼申し上げます。
- 開業されている先輩3名に近況を自由に語っていただきました。本企画はリレー形式としましたので、次号は他の先生に原稿をお願いする予定です。ご協力ください。
- その他、教室のゲスト、留学者の近況、新人紹介、新婚さん、私の趣味など盛りだくさんですが、楽しく読んでいただけたら幸いです。また、新企画のご提案がありましたら編集担当までお知らせください。
- 校正は特に慎重を期したつもりですが、誤りがありましたらご指摘ください。

(高橋 姿：記)

